

# 音楽教育専攻学部生の音楽授業観

— 「中等教科教育法（音楽）」における模擬授業の分析・評価を通して —

宮下 俊也

(奈良教育大学音楽科教育研究室)

森 長 はるみ

(奈良教育大学大学院音楽教育専攻音楽科教育専修)

A View of Music Practice of the Undergraduate of Music Education

— Through the Analyses of the Simulation Teaching —

Toshiya MIYASHITA

(Department of Music Education)

Harumi MORINAGA

(Graduate Student of Music Education)

**要旨：**本研究は、音楽教育を専攻する本学学部生が、音楽科の授業に対してどのようなイメージや認識（授業観）をもっているかを探ろうとするものである。そのために、教職専門科目「中等教科教育法（音楽）Ⅰ」において学生が行った中学校授業のシミュレーション（模擬授業）を対象とする、総合、実態把握、目標、資質、内容、方法、教材、教室環境、評価の各カテゴリー別学生相互の量的な評価、現職教員による収録ビデオを用いた質的な評価、の2側面からの分析を実施した。その結果、教育実習経験者の方が授業に対する厳しい批判の観点を有しているものの、それさえも、現実の中学校現場の授業実態とは大きく乖離した意識であることが明らかになった。この結果は、今後の教員養成大学における教職専門科目において、現場との自由な交流システムの開発が必要不可欠であることの示唆にもなり得る。

**キーワード：**音楽授業、教職専門科目「中等教科教育法（音楽）」、模擬授業

## 1. はじめに

新学習指導要領の中学校音楽及び高等学校芸術科音楽では、かつて見られなかったほどの大きな改訂がなされた。それはおもに次の5点である。①共通教材の廃止（中学校）、②和楽器の必修、③音楽の素材としての「音」及び自然音・環境音の取り扱い、④表現方法や表現形態の弾力化、⑤「音楽活動の基礎的な能力」の概念変更。

特に①や②についてはマスコミ報道などの影響もあって、教育関係のみならず社会に対しても予想以上に大きなインパクトを与えた。教育現場においても、特に日本伝統音楽に関しては現音楽科指導者のほとんどがその実技経験がなく、知識も西洋音楽に比して乏しい現状にあり<sup>1)</sup>、今後の指導方法やカリキュラムをめぐって、模索や試行錯誤が続いている。

こうした状況に対応して、関係機関や学会は実技講

習会やシンポジウム、先進事例を集めた研究会などを積極的に企画し、また出版、楽器業界もこれに関連する商戦を大々的に展開している。

しかしこうした加熱ぶりを冷静に伺っていると、改訂されたことに対する実践的方法論ばかりの需要と供給の構図が見えてきてならない。つまり、新しい音楽科教育の理念、目的、内容が結び付いた方法論として現場に伝わっていない懸念である。そのことを西村も、アспектばかりが先行し、コンセプトが欠落している、という言い方で厳しく批判している<sup>2)</sup>。なぜ共通教材を廃止するのか、なぜ素材としての「音」に立ち返るのか、なぜ和楽器なのか、そして和楽器の体験が音楽科の学習内容の何を実現させるのか等、改訂事項の「意味」に対する認識の欠如が、西村の述べるコンセプトの欠落と同義なのである。

一方、このことは教員養成大学における教職専門科目や教科専門科目の内容においても問題にされなけれ

ばならない。例えば、教員養成においてピアノ実技を教授することの意味は何か、オペラを体験させることは音楽科の学習指導に対してどういう意味をもつのか、そして、教員免許法の一部改正による「声楽（合唱及び日本の伝統的な歌唱を含む）」、「器楽（合奏及び伴奏並びに和楽器を含む）」<sup>3)</sup> ことの意味は何か、こうしたことが教員養成大学の教員と学生との間で共有されなければ、音楽科教育の本質を正しく理解した将来の教師が育たないし、これまでのように形骸化した音楽授業<sup>4)</sup> を今後も蔓延させ続けることになりかねない。

ところで、教育現場の加熱ぶりに比して、音楽科教師を志す学生の、改訂に対する意識はそれほど高まっているとは言えない。そしてそれより以前に、学生が音楽授業というものをどう捉え、何をどのように今後改善していきたいのか、ということが筆者にはなかなか見えてこない。そのところを事前的評価として明らかにしておくことが、とりわけ教科教育法の内容を決定する際に必要不可欠ではないかと考える。

音楽科教育研究においても、理論研究と実践研究の乖離が問題視されているが、教員養成において教科教育理論と実践をどう結び付けていくかは重要な課題となっているところである。

以上の問題意識から、教員養成大学における教職課程の改善の方略を開発する第一歩として、学部音楽教育専攻学生が抱く音楽授業観を明らかにするために本研究を計画した。

## 2. 目的

本研究は、音楽教育専攻学部生<sup>5)</sup> が音楽授業に対してどのようなイメージや意識をもっているのかを検討し、教職専門科目、とりわけ「中等教科教育法（音楽）」の改善を試みようとするものである。そのため、平成12年度前期「中等教科教育法（音楽）Ⅰ」において、当科目の受講生（以下、受講生と記す）が中学校の音楽授業を想定して行った模擬授業を対象に、そこから学生の音楽授業観を明らかにしようと考えた。

分析は、次の①～④の手順で行った。

- ① 模擬授業を評価するための項目を開発する。
- ② 模擬授業に対する受講生の評価結果を得る。
- ③ ②に対する考察を行う。
- ④ 現職教員が模擬授業の録画ビデオをもとに協議・検討し、③を現場からの視点で検証する。

以下、①～③を分析1、④を分析2と呼ぶ。分析1は3回の模擬授業を比較することによって考察していくものであり、分析2は比較ではなく、各授業を現場の実態に即しながら絶対的に見ていくものである。

## 3. 方法

### 3. 1. 模擬授業の概要

平成12年度の「中等教科教育法（音楽）Ⅰ」の概要は表1の通りである。

当初、第7回、第8回、第9回の講義を挟むことによって、その前後の模擬授業にどのような変化が見られるかも研究として関心があったが、後述する評価項目の開発が遅れ、第1、2回の模擬授業に間に合わなかったため、この問題については今回扱わないことにした。

よって、本研究は第3、4、5回の模擬授業（以下、第3回、第4回、第5回と記す）を対象として分析を

表1 平成12年度「中等教科教育法（音楽）Ⅰ」の概要

回	内 容
1.	ガイダンス
2.	講義 年間指導計画と学習指導案の作成(1)
3.	卒論・修論中間発表会への参加
4.	講義 年間指導計画と学習指導案の作成(2)
5.	第1回模擬授業と反省会
6.	第2回模擬授業と反省会
7.	講義 学習指導要領の解説(1) 教科の理念と目標の構造
8.	講義 学習指導要領の解説(2) 音楽の構造と指導内容
9.	講義 学習指導要領の解説(3) 配慮事項その他
10.	第3回模擬授業と反省会
11.	第4回模擬授業と反省会
12.	第5回模擬授業と反省会
13.	講義 音楽科における評価と評定

行うことにした。表2は、この3回の模擬授業の概略である。

### 3. 2. 分析1の予備手続きと方法

まず、模擬授業を客観的に評価するために、評価項目の開発を行った。手順は、水越（1985）、太田ら（1991）、高知県教育センター（1998）から抽出した音楽授業にも適応できる項目、新学習指導要領から考えられる評価観点に加え、筆者（宮下及び森長。うち森長は中学校音楽科の現職教員である）、音楽科現職教員2名（中学校音楽科教諭、養護学校中等部教諭）、音楽教育専攻大学院生1名及び学部生3名によるブレインストーミングによって得られた項目を、現場の実態に即し、実際の授業実践にも用いられることを考慮して集約・精選した。その結果、8カテゴリー（実態把握、目標、教師の資質、内容、方法、教材、教室環境、評価）49項目を決定した（表3）。

評価は、各回の模擬授業の終了直後に評価用紙を受講生全員（授業者も含む）に配布し、5ポイント（High: 5～Low: 1）によって回答者ベースで記入させた。その回の模擬授業に該当しない項目に対しては、回答者の判断により斜線を引かせた。記入後はただちに回収した。

表2 模擬授業の概要（授業者が提出した本時案からの抜粋）

回	第3回		第4回		第5回	
題材	「声を使って楽しもう」		「情景を思い浮かべながら歌おう」		「インドネシアの郷土芸能ケチャに挑戦」	
目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>声を合わせる時の響きを感じる。</li> <li>人と声を合わせるにより生まれる可能性の広がりを感じる。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>歌詞の意味を理解した上で情景を感じ取る。</li> <li>情景を思い浮かべながらのびのびと歌う。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>ケチャの鑑賞と活動を通して意識的に音楽を聴く。</li> <li>ケチャを意識的に聴取して深い面白さを味わった結果、多様な音楽への興味・関心を持つ。</li> </ul>	
授業の展開	指導内容	学習活動	指導内容	学習活動	指導内容	学習活動
	<p>声についての話。</p> <p>『カノン』の音とり指導。</p> <p>輪唱の指揮と指示。</p> <p>感想を聞く。</p> <p>ハーモニーについての説明。</p> <p>『きらきら星』の音とり指導。</p> <p>ソプラノ、アルト、テノール、バスの順に音とり指導。</p> <p>感想を聞く。</p>	<p>『カノン』の音とり。</p> <p>『カノン』の斉唱。</p> <p>『カノン』の輪唱。</p> <p>感想を発表する。</p> <p>『きらきら星』の音とり。</p> <p>『きらきら星』の合唱。</p> <p>4パターンの合唱。</p> <p>感想を発表する。</p>	<p>曲の提示と発声指導。</p> <p>学習のねらいの提示。</p> <p>歌詞の意味を理解させる。</p> <p>情景を思い浮かべさせる。</p> <p>表現方法の指導。</p>	<p>発声練習と柔軟体操。</p> <p>『椰子の実』の鑑賞。</p> <p>『椰子の実』の音とり。</p> <p>歌詞の意味を考える。</p> <p>現代語に訳す。</p> <p>歌詞を声に出して読む。</p> <p>情景を想像して絵に描く。</p> <p>情景を思い浮かべながら歌う。</p> <p>強弱、息の使い方、フレーズなどに注意して歌う。</p>	<p>第1・2時(ケチャの歴史、子音の発音)の復習(仮想)。</p> <p>ケチャの歌唱指導。</p> <p>パート練習の指導。</p> <p>合唱の指導。</p> <p>まとめ</p>	<p>前回までの授業内容の説明を聞く。</p> <p>パート分け。</p> <p>全員で一度通して合唱する。</p> <p>全員で教師と共にゆっくり斉唱しながら通す。</p> <p>ベースリズム(教師)とその他のパート2声部ずつ、計3パートでリズムを合わせる。</p> <p>スローテンポで1段ずつ合わせる。</p> <p>徐々にテンポを速くしていく。</p> <p>全員で合唱。</p>

表3 開発した授業評価項目

No.	カテゴリー	評価項目
1	実態把握	生徒の実態を的確に把握していたか。
2	実態把握	生徒とコミュニケーションがうまくできているか
3	目標	教師が、その授業のねらいを明確にもって授業に臨んでいるか。
4	目標	それぞれの活動について、目標(意味)提示を行っているか。
5	目標	学習の目標をはっきりと示したか。
6	資質	教師は明るく元気か。
7	資質	熱意を持って授業を行っていたか。
8	資質	話し方はわかりやすかったか。
9	資質	声は聞き取りやすかったか。
10	資質	教師のパーソナリティーを生かした授業か。
11	内容	目標達成を目指した内容構成であったか。
12	内容	領域相互に関連をもたせた指導であったか。
13	内容	基礎・基本(音楽の諸要素に対する感受性)の定着を視野に入れた指導がなされているか。
14	内容	授業内容に誤りはなかったか。
15	方法	活動を中心にした授業であったか。
16	方法	受容的・共感的姿勢で生徒に接しているか。
17	方法	生徒の主体性を引き出す授業であったか。
18	方法	授業の最後に、本時の内容を整理したか。
19	方法	板書計画は適切であったか。
20	方法	機器・教具が効果的に利用されていたか。
21	方法	指導計画の展開に柔軟性があったか。
22	方法	授業の導入において、生徒がスムーズに活動に入れる工夫をしていたか。
23	方法	全体に目配りができているか。
24	方法	生徒の発言(ことば、つぶやき)やしぐさや表情などをとらえていたか。

表3 開発した授業評価項目(つづき)

No.	カテゴリー	評価項目
25	方法	個々の生徒の発言や表現をクラス全体のものへとつなげているか。
26	方法	できない生徒にも自信を持たせられる配慮を行っているか。
27	方法	活動に対する指示の出し方は適切か。
28	方法	技能面的的確な指導ができていたか。
29	方法	板書において、位置、字の大きさ、色などに配慮・工夫がなされているか。
30	方法	生徒の演奏活動に対して、適切な助言が与えられていたか。
31	方法	時間どおりに授業を開始、終了できたか。
32	方法	教師の発問の仕方や内容が適切であったか。
33	方法	教師の範唱や範奏が、効果的に取り入れられているか。
34	方法	生徒の活動の人数構成は適当か。
35	方法	授業の流れや時間配分は適切であったか。
36	方法	授業はていねいでわかりやすかったか。
37	方法	授業の雰囲気づくりがうまくいっていたか。
38	教材	十分な教材研究がなされているか。
39	教材	興味深く、親しみやすい教材になっているか。
40	教材	教材の選択は、指導目標や生徒の実態に対し適当か。
41	教材	授業の内容について十分な知識を持っていたか。
42	教室環境	座席の配置の形態は、活動内容に適当であるか。
43	教室環境	授業を段取りよく進めるための準備(機器、楽器、教具など)は周到か。
44	教室環境	教室の環境整備(照明、通風など)はなされているか。
45	評価	評価が目標と一貫性を持っているか。
46	評価	一人一人の生徒の中に、良い所(肯定部分=評価できる点)を見出す努力をしているか。
47	評価	生徒の表現(発言、演奏)に対して、評価をあたえているか。
48	評価	生徒に自分たちの活動に対する、シェアリング(振り返り)を行う機会を与えているか。
49	評価	この授業によって生徒の期待していたものが満足されたか。

### 3. 3. 分析2の予備手続きと方法

分析2の協議・検討を行うために、次の2つの材料を用意した。1つは、模擬授業を収録したビデオである。3回の模擬授業とも、授業者をとらえるカメラと、生徒役の受講生をとらえるカメラの2台で録画し、後に、授業の全容がわかりやすいように1本に編集した。なお、授業者が作成した学習指導案(本時案)も用意した。

もう1つは、受講生によって提出された、模擬授業とそれに引き続いて行われた反省会についての全体的な感想文(以下、感想メールと記す)である。これは、すべての受講生(授業担当者も含む)に対し電子メールで提出させたものである。

分析は、編集したテープを再生し、ストップモーションをかけながら、筆者のうちの森長<sup>6)</sup>と現職教員1名を含む評価項目を開発したメンバーの協議によって行った。現職教員以外の者(学部学生)を協議に参加させた理由は、学生の立場からの意見を交えながら協議を行った方が議論が活発化するものと考えたからである。また協議の中では必要に応じて感想メールも検討の対象にした。検討結果は文字による授業記録に時系列にそって加筆し保存した。

## 4. 分析結果と考察

### 4. 1. 分析1の結果

分析は、“実態把握”、“目標”などの8つのカテゴリーに、49評価項目すべてを対象とする“総合”カ

テグリーを加え、合計9カテゴリーの評価結果それぞれについて行うことにした。そして、受講生には教育実習経験のある者とない者がいたので、実習経験(2)×各回の模擬授業(3)の2要因分散分析を行った。表4-1~4-7は各カテゴリーの人数、評定値の平均と標準偏差、分散分析の結果を示したものである。なお、“資質”と“教室環境”は一部の群に天井効果が見られたので結果は棄却した。また、交互作用はどのカテゴリーにおいても有意でなく、多重比較において有意

表4-1 “総合” 評価結果

	実習経験なし			実習経験あり		
	3回	4回	5回	3回	4回	5回
N	9	9	10	8	6	8
Mean	4.17	3.33	3.95	3.44	2.93	3.91
S.D.	0.42	0.40	0.35	0.55	0.39	0.51

実習経験群の主効果: (F(1,44)=8.42) \*\*  
 模擬授業の主効果: (F(2,44)=13.62) \*\*  
 多重比較結果: 3回>4回\* 5回>4回\*  
 (MSe=0.2222, p<.05) by LSD

表4-2 “実態把握” 評価結果

	実習経験なし			実習経験あり		
	3回	4回	5回	3回	4回	5回
N	9	9	10	8	6	8
Mean	3.78	3.33	4.00	3.25	2.92	3.94
S.D.	0.63	0.78	0.59	0.70	0.93	0.39

実習経験群の主効果: ns  
 模擬授業の主効果: (F(2,44)=5.55) \*\*  
 多重比較結果: 5回>4回\*  
 (MSe=0.5233, p<.05) by LSD

表4-3 “目標” 評価結果

	実習経験なし			実習経験あり		
	3回	4回	5回	3回	4回	5回
N	9	9	10	8	6	8
Mean	4.13	3.30	3.60	3.75	2.89	3.54
S.D.	0.51	0.64	0.66	0.78	0.50	0.82

実習経験群の主効果: ns  
 模擬授業の主効果: (F(2,44)=5.86) \*\*  
 多重比較結果: 3回>4回\*  
 (MSe=0.5002, p<.05) by LSD

表4-4 “内容” 評価結果

	実習経験なし			実習経験あり		
	3回	4回	5回	3回	4回	5回
N	9	9	10	8	6	8
Mean	4.01	3.39	3.86	3.44	2.92	3.72
S.D.	0.65	0.52	0.34	0.72	0.85	0.65

実習経験群の主効果: (F(1,44)=4.33) \*  
 模擬授業の主効果: (F(2,44)=4.54) \*  
 多重比較結果: 3回>4回\* 5回>4回\*  
 (MSe=0.4369, p<.05) by LSD

表4-5 “方法” 評価結果

	実習経験なし			実習経験あり		
	3回	4回	5回	3回	4回	5回
N	9	9	10	8	6	8
Mean	4.03	3.19	3.85	3.22	2.90	3.79
S.D.	0.57	0.62	0.44	0.48	0.40	0.45

実習経験群の主効果: (F(1,44)=6.29) \*  
 模擬授業の主効果: (F(2,44)=9.07) \*\*  
 多重比較結果: 3回>4回\* 5回>4回\*  
 (MSe=0.2928, p<.05) by LSD

表4-6 “教材” 評価結果

	実習経験なし			実習経験あり		
	3回	4回	5回	3回	4回	5回
N	9	9	10	8	6	8
Mean	4.06	3.31	3.98	3.18	2.83	4.06
S.D.	0.73	0.37	0.54	0.80	0.99	0.60

実習経験群の主効果: (F(1,44)=4.10) \*  
 模擬授業の主効果: (F(2,44)=7.13) \*\*  
 多重比較結果: 3回>4回\* 5回>4回\*  
 (MSe=0.5175, p<.05) by LSD

表4-7 “評価” 評価結果

	実習経験なし			実習経験あり		
	3回	4回	5回	3回	4回	5回
N	9	9	10	8	6	8
Mean	4.00	3.02	3.87	3.02	2.67	3.75
S.D.	0.54	0.67	0.43	0.60	0.43	0.96

実習経験群の主効果: (F(1,44)=6.37) \*  
 模擬授業の主効果: (F(2,44)=8.83) \*\*  
 多重比較結果: 3回>4回\* 5回>4回\*  
 (MSe=0.4485, p<.05) by LSD

でなかった比較については表への記載を省略している  
 (\* p<.05 \*\* p<.01)。

#### 4. 2. 分析1に対する考察<sup>7)</sup>

表4-1~4-7に示した結果を項的に整理すると次の2点になる。それらに対して考察を試みる。

第1は、“総合”を含むすべてのカテゴリーにおいて、教育実習経験者の方が厳しい評価を行っている、というごく当然の結果である。わずか1度の実習経験ではあるが、そこで行われた指導計画の立案、実践、評価等の経験によって、経験がない者よりも授業を批判的に見る力が育成されているのではないかと考えられる。

第2は、授業全般にわたる総合的な評価、内容に対する評価、方法に対する評価、教材に関する評価、授業過程における評価に対する評価については、第4回よりも第3回、第4回よりも第5回の方が有意に高かった、という結果である。第4回は、歌唱教材『椰子の実』を歌う、という典型的な「楽曲による題材構成」であり、途中、歌詞のイメージを絵画表現させる場面も見られたものの、発声練習、楽曲の鑑賞、ソルフェージュ的な視唱練習、歌詞の現代語訳、ブレスや強弱などの技術的な歌唱指導、と続く、言わば古典的な音楽授業のスタイルであった。それに対し第3回は、ユニゾンからカノン、さらには借用和音やジャズを感じさせる変化和音を含んだハーモニーへと進ませていく学習過程や、単純でありながらも新鮮な音色を放つ教材を用いたことに工夫の跡が見られた。また、作り上げられていくハーモニーをとところどころで聴き合わせて言葉でイメージを表現させるなど、受講生にとっては柔軟性のある授業だと判断によって、第4回との差が生じたものと考えられる。

また、第4回の授業者に比べ第3回の授業者は言葉遣いや授業の雰囲気作りなど、明らかに指導馴れた感があった。第3回の授業者は過去に4週間の中学校での実習と2週間の小学校での実習経験、さらにブラスバンドの指揮者としての指導者経験がある。一方、第4回の授業者は実習経験がなく、たどたどしい面もあった。そうした印象が受講生の評価結果に表れたものと推測される。

第5回はアジアの民族音楽ケチャを扱ったが、単に『椰子の実』を歌わせた第4回とは、教材から受ける受講生の興味に明らかな違いがあった。また、「いいですねえ」という授業者の賞賛の発言が多くなされていたことも“評価”カテゴリーの差を有意に高めたものと考えられる。この授業者は実習の経験はないが、模擬授業の直前に教育実習事前指導を受け、マイクロティーチングを経験している。対して第4回の授業者の実習予定は来年であることから、授業に向かう意識に差があったことも予想できる。

#### 4. 3. 分析2の結果

分析2の協議・検討において、現職音楽科教員が提出した指摘は、概ね次のようにまとめることができた。

##### (1) 第3回に対して

- ① ねらいと指導に一貫性がない。
- ② 生徒（生徒役の受講生のこと。以下同様）の主体性を引き出す活動になっていない。
- ③ 生徒の解答をうまく引き出す発問ができていない。
- ④ 活動への導入が適切になされていない。
- ⑤ 授業の進行に柔軟性がなく、生徒が退屈するような単調な活動が多く見られる。
- ⑥ 場面転換の仕方には工夫が見られる。

##### (2) 第4回に対して

- ⑦ 一つ一つの活動のねらいが不明瞭。
- ⑧ 指示や発問が機械的である。
- ⑨ 生徒一人一人の意見を全体に広げていない。
- ⑩ 板書が効果的に使われていない。
- ⑪ 説明の仕方が不適切。
- ⑫ 活動後の評価が行われていない。

##### (3) 第5回に対して

- ⑬ 指導が技術面に偏っている。
- ⑭ 活動の形態が不適当。
- ⑮ 評価がワンパターン。
- ⑯ 教師対生徒のやり取りに終始し、生徒同士のやり取りがない。

#### 4. 4. 分析2に対する考察<sup>3)</sup>

①及び⑦は目標と指導の関係に対する指摘である。例えば、第5回のケチャのテンポを次第に速くしていく場面では、速くすることによって得られるケチャ本来の面白さや楽しさを感じ取らせることを目標としているのに、いつしか、テンポとリズムが正確に歌えることの訓練へと変更されている。受講生の感想メールでは「ケチャの楽しさを味わうことができた」というものが多かったが、実際の中学生では、それを感じる前に技術訓練のつらさで挫折してしまうことを見通した指摘であると考えられる。

③⑧⑨⑩⑪は、指導言を含む指導技術に関する指摘である。特に第4回の授業者に対しては厳しい評価が出され、分析1の結果とも一致するものであった。このことから、学生は、指導言や板書計画などの実践的な指導技術に対する実践力は乏しくとも、それらについての重要性や理想とする適切なスタイルは理解しているのではないかと予測することができる。

感想メールには指摘が見られなかったものとして、第5回の⑬⑭⑯が挙げられる。⑬に関しては、「繰り返

返し練習という、音楽において非常に重要な要素を含んでおり、よかったと思う」という受講生さえ見られた。⑬は「技術習得への偏重」、⑭は「教師中心主義」などとこれまで長く音楽科教育の問題点として言われ続けてきたことであるが、学生にとってはこれらについての問題意識が薄いのかもしれない。

また、⑫や⑮のように評価の仕方に対しては多くの指摘があった。音楽授業は音や音楽による表現活動が主体であり、なおかつ瞬時にしてそれが消え去るという特異性をもつ。第4回では、歌詞の意味を答えさせたり、歌ったりさせる活動があったが、それぞれの活動に対するこまめな評価言が欠落して、そのまま次の活動を指示していく場面が多く見られた。また第5回での「評価がワンパターン」とは、「いいですね」という賞賛の言葉が頻繁に使われていることへの批判である。

ところで分析1では、この賞賛の発言に対して受講生は高く評価したとして考察を述べたが、現職教員は必ずしもそうではないことを指摘している。この、学生と現職教員の認識の違いは、誉めれば生徒の意欲を喚起できる、というこれまでの自明性が現代の中学生には単純に当てはまらない現実への認識の違いではないかと考える。音楽科教育でも自明性が立証を先行して実践化されていることがいまだに多くある。例えば、歌唱活動の導入には既習曲を歌わせる、歌唱活動は発声練習から始める、鑑賞はまず楽曲の背景を説明する、等々である。自明視されていることが、現在の教育現場に果たして効果的な適応をもたらしているものなのかどうかを再検討し、今後、教職専門科目で学生に伝えていく必要があるだろう。

同様に、第3回についても指導過程に工夫の跡が見られるという考察を提出したが、現職教員は②④⑤に示すように、興味・関心、意欲をもたせる工夫の欠如を指摘した。感想メールには「カノンはやりがいのある楽しい練習で、和声の勉強に適していると思った」というものと、「展開の部分が導入の部分より失速する形になり、生徒の興味・関心を満たせるものではなかった」というものがあったが、分析1との食い違いは、音楽専攻の大学生相手の授業ではよくても、現実の中学生には適応できない指導内容や方法である、という理由から生じたものであろう。

#### 5. 考察の総括

最後に、それぞれの分析を通して行った考察を総括し、音楽教育専攻学生のもつ音楽授業観についての結論を述べたい。結論は1つである。

すなわち、学生のもつ音楽授業観は、現代におけるリアルな学校現場や音楽授業の実態がインプットされて形成されているものではない、ということである。

つまり、学生が考える音楽授業と現実の音楽授業とはかなりの隔りがあるのである。それでは現実と隔っている授業観はどこで形成されたのか。予想できることは2つある。1つは、学生自身が数年前に受けた中学校の音楽授業をそのままイメージしているという予想である。言うまでもなく、ここ5年以上の間には中学生をはじめとする若者と音楽との関係が大きな変容を見せている。そのことは学校音楽教育の授業実態の変容にも多分に影響を与えている。しかし、西洋クラシックを中心とする偏った音楽への価値観や、技術習得や知識の記憶・再生を音楽の感性的側面の感受と切り離して求める授業など、授業を受ける側であった学生達にとって、それが今もごく当然のように音楽授業の在り方として意識化されているのではないだろうか。

予想できる2点目は、音楽教育専攻の学生は、これまでピアノや声楽などの専門的な音楽教育を受けており、それがそのまま学校音楽教育の授業観として築かれているのではないかということである。その専門教育の大部分は西洋音楽の実技及び西洋音楽の理論であり、多様な音楽体験や音楽の文化的背景に対する学習、美の享受や追求などほとんど経験していないはずである。つまり学生がこれまで受けてきた音楽学習に横たわる問題点と、学校音楽教育が今、克服しようとしている問題点とがまさに一致するわけである。

## 6. おわりに

2点の予測の真偽はともかく、本研究では、学生による授業のシミュレーションを通して、学生が抱く音楽授業観が現実の音楽授業と大きく乖離していることが明らかになった。しかしこの結論は、これまでの教職課程のシステムにおいては、当然のこととも言える。なぜなら、音楽科教育として、我が国における小、中、高等学校、教員養成大学と一貫したカリキュラム開発のための研究をしてきたわけでもないし<sup>9)</sup>、また大学の教職科目において、現場と密に交流し合う内容や方法を模索してきた研究形跡もない。

それでは、今後この隔りを解消していくような教員養成大学における教育はどうあるべきか。教職専門科目における教科教育法に限定して、3つの提言をしたい。

1点は、教科教育法の授業を常に公開し、特に地域の教員が教員養成の実態を見たり知ったりできるようにすべきである。これまで大学側が現場の授業に対して指導・助言を行うことのみがなされてきたが、現場の教員が大学の授業や教師を目指す学生に、意見、情報提供、アドバイスなど自由に述べられるようなシステムを作るべきである。

2点は、現場に対してであるが、システムとしての教育実習のみならず、学生が柔軟に授業見学できたり、

時にはアシスタントぐらいでも経験できたりするようなオープンな関係を築くことである。

3点は、現職大学院生や現場の教員による学生相手の模擬授業を教科教育法で積極的に実行すべきである。今回の授業評価のように、学生が生徒役に立つことによって見えてくるものは重要で、授業を批判的に検討する視点もできてくる。その時、現場の教師が教師役であったなら効果は絶大であろう。

いずれも現場と大学との開かれた柔軟な関係を必要とするものであるが、これらの実施・検証を本研究の今後の課題としたい。

## 註

- 1) 峯岸創編著『中学校新教育課程の解説』(第一法規、1999)のp.7を参照されたい。
- 2) 日本学校音楽教育実践学会第5回全国大会(2000.8.18)におけるシンポジウム「学校音楽教育において日本伝統音楽の学習をどう位置づけたいか」で、シンポジストの西村朗(作曲家)が提言した。シンポジウムの詳細については以下を参照されたい。宮下俊也「偏った音楽観によるこれまでの教育を超越し、新たな正しい音楽科教育を求めて」、『教育音楽 中学高校版』11月号、音楽之友社、2000、pp.68-69。
- 3) 免許法施行規則第3条、4条より。他に「音楽史(日本の伝統音楽及び諸民族の音楽を含む)」の部分で改正された。
- 4) 例えば、評価が形骸化した音楽授業については以下で詳しく論じている。宮下俊也「音楽授業における評価の形骸化とその原因」、『音楽教育学』、第26-4号、日本音楽教育学会、1997、pp.1-10。
- 5) 「中等教科教育法(音楽)Ⅰ」を受講した学生を対象とするので、小・中学校教員養成課程音楽専攻と総合文化科学課程芸術文化コース音楽文化専修の学生のことを指す。
- 6) 筆者のうち宮下は中等教科教育法の担当教官であり、すでに授業の実際を見ているので参加はしたが発言は控えた。また、結果はすべて現職教員の指摘から抽出したものであり、学部生の意見は取り上げていない。
- 7) この考察は宮下が単独で行った。森長は関与していない。
- 8) この考察は宮下と森長が行った。
- 9) 日本学校音楽教育実践学会では2001年から5ヵ年計画の課題研究として、このカリキュラム開発を行う予定である。

### 参考文献

- 水越敏行、『授業評価研究入門』、明治図書、1985  
太田あや子、木下茂昭、太田繁、大橋道雄、「授業評価票を用いた学生による授業評価に関する研究」、『東京学芸大学紀要』5部門、43、pp.211-220、1991  
高知県教育センター「豊かな学力を育てる学習指導と評価」、平成9年度研究紀要、1998

### (付記)

- ・本研究は、文部科学省による「教職課程における教育内容・方法の開発研究」の委嘱を受けて行ったもの

であり、本稿はその研究の中間まとめの一部である。

- ・本研究は、日本学校音楽教育実践学会第5回全国大会で口述発表された研究（「教員養成大学の学部生は音楽授業をこう考える—教職科目における模擬授業の分析・評価を通して—」（発表者：岩田真理、浦部恭子、陶久奈々、森長はるみ）で用いたデータに、新たな視点による考察を加えたものである。加えた部分は本稿4. 2.、4. 4.、5.、6. であり、考察は主として宮下が行った。また、口述発表研究のうち、岩田、浦部、陶久（以上は本学学部生）が行った部分は、データに対する学生の立場からの考察であり、本研究ではその目的と異なるので割愛した。

- ・データ処理や分析等において、宮下ゼミの学生、院生諸氏には大変お世話になった。深く感謝いたします。